

増上寺徳川家霊廟の風景（3）

番外編 三解脱門前の風景

増上寺のシンボルともいえる三解脱門は、慶長10年（1605年）に建立された都内最古の木造建造物で、現在国の重要文化財に指定されている。三解脱門自体は昭和46年から49年にかけての解体修理により綿密な調査が行われ『重要文化財増上寺三解脱門及び南北繋堀南北山廓保存修理報告書』が残されている。

増上寺を語る時この巨大な山門は無くてはならないものであり、東京の名所建物の一つとして絵葉書、錦絵の中にその姿が残されている。



写真1 増上寺三門前（大正3年～9年）



写真2 増上寺三門前（大正9年以降）



写真3 写真1の拡大

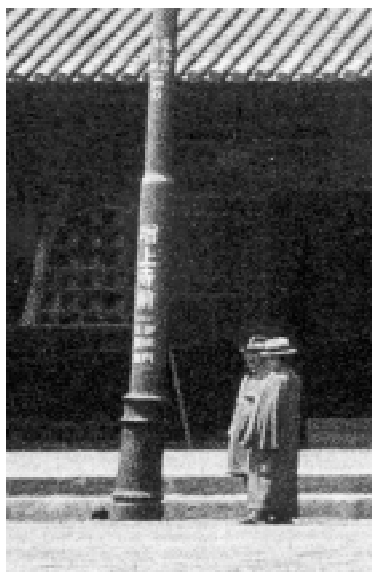


写真4 写真2の拡大

写真1に代表される構図はどれも一見同じように見える山門前の風景だが、定点写真の様に写し出された画像を丹念に見比べて見れば、幾つかの時代層が美事に描き出されているのが判る。

前回にも紹介したが、本来將軍の参詣の為に整備された御成道は、明治十一年以降の芝園橋の架橋により大きく道の形を変え、東京を南北に貫く交通の要衝の一つとなっていく。

明治37年6月21日この道路上に東京市街鉄道により路面電車が敷設される。

増上寺三解脱門の前にも停留所が設けられ当初は「山門前」と名付けられた。停留所名は写真3、4に見るように、道路中央の架線柱に掲げられていたが、その名前も残された路線系統図から

明治40年3月には「山門前」

（『東京市内電車案内図』）

大正3年6月には「三門前」

（『電車運転系統図』）

大正9年10月には「増上寺前」

（『電車運転系統図』）

大正15年3月には「増上寺前」

昭和19年には「芝区役所前」

（『東京都電車運転系統図』）

昭和37年10月には「芝公園」

（『電車案内図』）

と変わっていたことが判っている。

従って架線柱に掲げられた停留所名が判れば、写真のおおよその年代の判定が可能になる。

写真1の中央の架線柱の拡大写真3からは「三門前」と読み取れ、写真2の拡大写真4からは「増上寺前」下に前後の停留所名「芝園橋」「御成門」と有るのが判る。

残念ながら筆者の所蔵品でないので掲載は出来ないが手彩色の絵葉書には「山門前」と書かれたものがある。今回は代わりに大正元年に発行された東京名所を描いた錦絵『芝公園増上寺山門前之景』を掲げておく。手前の架線柱中央に「山門前」その下部に「芝園橋」と記されているがご覧になれるであろうか。

筆者は絵葉書の中に頻りに登場する市街電車の型式によって何かが掴めるかと考えてみたが、市街電車は改造を重ねて使い続けられるので型式だけで年代推定を行うのは無理なことが判った。

写真6は開山西誉上人五百回忌遠忌事務局の発行した『増上寺絵傳』の中の写真で、西誉上人の五百回忌は昭和14年（1939年）に当たるので戦前の三解脱門前の写真になる。残念ながら路面電車の姿は見られないが安全地帯のある停留所が道路に設けられているのが判る。

何時頃から安全地帯のある停留所が道路面に設けられたかは判らないが、昭和5年5月7日の朝日新聞夕



写真5 東京名所 芝公園増上寺山門前之景



写真6 『増上寺絵傳』より



写真7 「御霊屋特別 拜観券」(筆者蔵)

刊の記事に「『安全』どころか 危険極まる暗礁 市電停留所の『安全地帯』で続出する交通事故」と題して以下の記事がある

「GO・STOP 器の改良、横断歩道の案出、歩き方の指導など、交通安全のために智慧を絞っている当局では最近市電停留所の安全地帯をどんどん増設して二百五十ヶ所にした、電車の乗客はこのため弾丸のやうに疾駆する自動車等の脅威から安全に護られてホッと安心してゐるが思ひがけなくもこの安全地帯が自動車、オートバイ、自転車の乗り上げる暗礁となりそのための交通事故が激増するという珍現象をひき起してゐる。

問題の安全地帯は今まで交差点のみであったのが交通不安な主要停留所に設けられた幅二、三尺高さ四、五寸のものであるが、それに何等の標識がなく夜などは僅かに歩道わきポールの薄暗い電燈だけなのでよく存在がわからぬ(下略)」

少し長い引用になったが、安全地帯が何時どのようにして設置されたかという事に関して書かれたものが少ないので参考までに掲げておく。

おそらく増上寺前にもほぼこの時期に安全地帯が設置された物と思われる。三門前を写し出す写真にも路面電車と共に自動車の姿が見られるようになり、路上で電車を待つことに危険が伴うようになり、安全地帯の設置が急がれたことが判る。絵葉書の中には、写真6よりはもう少し簡素な安全地帯が写し出されている物が有るので、或いは新聞記事の事態を承けて、目立つ物に改良された後の写真であろう。

戦後、急速なモータリゼーションの波に逐われ、路面電車は次々に姿を消す事になる、増上寺前の路線である2、5、8系統は昭和42年12月9日に廃止され、軌道も撤去されて現在の姿に変わる。

少し話を戻したい。明治32年5月10日に発行された『地理教育 鉄道唱歌』は空前の大ヒットとなり、この唱歌ブームにおされて明治38年9月12日には市街電車の風景を読み込んだ『地理教育 電車唱歌』が発行された。いま増上寺に係わる部分をあげておく。

- 1 2 芝の離宮や濱御殿
 拝みて此処は増上寺
 大門前に降りたてば
 先目にとまる朱塗門
- 1 3 碧の蕨苔むして
 二百餘年の太平の
 基を開きし家康が
 御霊を祝る靈廟あり
- 1 4 世にも名たる工等が
 一期の精を盡したる
 其の結構の麗はしさ
 何に譬えん様もなし
 (中川柳涯 作詞 深谷白川 作曲)



写真8 写真2の拡大

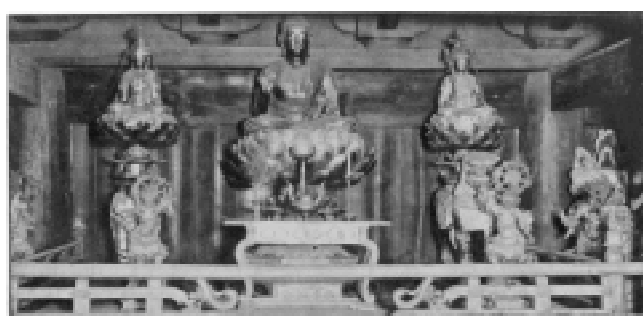


写真9 釈迦三尊像及び十六羅漢像



写真10 『幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース』

さて増上寺の風景と言えば、東京の下町の風情をこよなく愛した永井荷風が明治43年に発表した随筆『霊廟』を忘れることは出来ない。

「自分は三門前と呼ぶ車掌の声と共に電車を降りた。そして前松左右に匍匐する松の幹の間に立ってその姿に見とれた時、幾年間全く忘れ果ててしまった霊廟の屋根と門とに心付いたのである。しかしその折にはまだ裏手の通用門から拝観の手続きをなすべき案内をも知らなかったので、自分は秋の夜の静寂の中に畳々として波の如く次第に奥深く重なって行くその屋根と、海のように平かな敷地の片隅に立ち並ぶ石燈籠の影をば、廻らされた柵の間から恐る恐る覗いたばかりであった。

翌日自分は昨夜降りた三門前で再び電車を降りて、まず順次に一番端れなる七代将軍の霊廟から、中央にある六代将軍、最後に増上寺を隔てて東照宮に隣りする二代将軍の霊廟を参拝したのである。」

荷風が書いている「裏手の通用門から拝観の手続きをなすべき案内」というのは今ひとつ良く判らないが、霊廟を拝観するにはそれなりの手続きが必要だったことがわかる。

写真6は最近入手した「御霊屋特別拝観券」だが、残念ながら年代がはっきりしない。北と有るのは北霊廟のことと考えられるから、北と南の霊廟それぞれで拝観券を入手して霊廟の拝観を行ったに違いない。

荷風は随筆のこの後の部分で、説明者のことを書いているから、何人か纏めて霊廟内を案内する方式であったようだ。

拝観と言えばこの三解脱門の楼上層部には釈迦三尊像、十六羅漢が安置されており拝観が許されていたようだ。(写真は前記『増上寺絵傳』による)

写真8は写真2の左の南廓門部を拡大した物だが、脇の看板には「三門拝観 宝物展覧」の文字が見える。

明治39年9月25日発行の『風俗画報臨時増刊 新撰東京名所図会第八編』の挿絵には「七月六日増上寺三門を開き諸人登楼するの図」を掲げ第六編の記事中には

楼上に釈迦如来(御長三尺五寸)普賢菩薩(左)文殊菩薩(右 各一尺九寸)併に十六羅漢(各四尺五寸)木像を安置す。毎年正月七月の十六日二月八月の彼岸の中日又二月十五日四月八日等に登楼を許せり。

とし、撰門の『三縁山志』からの引用で

釈迦普賢文殊等初長門国泰然寺にありしを依台名移鎮(京東福寺山蔭同作同尺と云)異国伝来の尊像故殊の外破壊せしを京四条室町通(山伏町)絵所法眼徳悦彩色にて寛永元子年五月成就安置其後貞享二丑年四月加彩色(佛氏源慶)

原文()は割注

この記事からすると、明治39年当時は年何回かに限って登楼を許して居たようだ。荷風の文章に三門登楼の記事が無いのは、この解禁日に当たらなかった為だろう。写真2では常時拝観を許して居たようで時代によって拝観の形にも違いが見える。因みに現在は三門の痛みが激しく安全上の理由から登楼を許して居ない。

さて最後に長崎大学付属図書館の『幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース』の中から1葉の写真を紹介したい。

三解脱門の北山郭の手前と南山郭の奥の道路上に床見世の様な建物が幾つか見られる。

データベースの解説によれば

「増上寺の山門。隣に茶屋が見え、障子に「武蔵屋」と屋号が書かれている。縁台の下にはローマ字と漢字で「芝」と書かれた看板が見られるが、おそらく記念撮影用だろう。」
としているが、今少し関連の記事を掲げてみる。

私共儀、明治五年中、南北松原（三門前）ヲ一旦三緑町ト称ヘ候節 御府御聞濟ニテ初テ家事建築シ 出稼
営業罷在候処 追々家数増加致シ 或ハ他ノ家作ヲ買請候テ移住ノ向モ有レ之 其後右町名被レ為レ廢 同七年
ニ至リ公園ノ候被レ仰出 人員寓居不苦旨御口達ニ付 仮住居ト雖實際居住安眠罷在候処 去十二日御府
ヨリ右公園着手ニ付来ル六月十五日限り早々家作取毀チ、至急引払フベキ旨ノ区務所ヨリ申渡サレ候ニ付、
原ヨリ永住相成ザルハ吾々熟知罷在候事故、速ニ引払可レ申ハ勿論ノ義ニ候所 両三年前ヨリ世上一般不
景氣ナルニ殊ニ西南紛擾ノ事件后ハ更ニ不景氣ノ上ニ 又一層ノ不景氣ヲ相加候故、家々朝炊暮烟モ漸クニ
シテ相立候程ナルニ、過半ハ揚引店写真等ノ営業ノ者ニテ、一体右等ノ業体ハ他ノ商買トハ相異リ、尋常一
様ノ市街中ニ混シ居往相設候トモ営業ニモ不_レ相成_レ加之家屋ヲ取毀チ運搬、更ニ建築等ニ巨額ノ失費、殆ン
ド一時営業ヲ相失ヒ候姿ニモ立至リ候事故、只茫然トシテ当惑罷在ノミ、冀クハ該地各民ノ目下方向ヲ失ヒ
候實際憫然ノ状情ヲ熟々御洞察被_レ成_レ下_レ候テ、自今若干ノ延期ヲ被_レ仰出_レ候ハバ 各自奮揮勉勵ノ余義ヲ積
貯シ、以テ速ニ移転ノ方法ヲ相立可_レ申候間 何卒出格特別ノ御詮議ヲ以テ延期御聞濟ノ程 伏テ奉_レ懇願_レ候

明治十一年五月十七日

南北松原新道通

山岸新蔵（外三十六人略）

この記事の中では「過半ハ揚引店写真等ノ営業ノ者ニテ」という記述がデータベースの解説との関連で気になる。明治5年に公園地指定とのからみで増上寺は山内に床見世を許可したが、文面からこの11年の時点では36人が名を連ねる床見世の過半が「揚引店写真等ノ営業」、恐らく写真の様に茶店であり職人を置いて記念写真を撮らせる業者で有ったことがわかる。明治11年といえば西南戦争の翌年であり、まだ徳川政権が崩壊してからも何年の日々を隔てているわけではない。文明開化のご時世とはいえ徳川家霊廟前の風景としてはいかにも急速に変わり行く時代の絵姿と言えるかも知れない。

最後に、市電に関する記述の多くは林順信氏の『東京・市電と街並み』『東京市電名所図絵』『都電が走った街今昔』に負っていることを付記しておきます。

次回は再び南霊廟に戻って台徳院御霊廟、崇源院御霊屋の風景をお伝えしたいと思います。